

第14章 特用林産物シュロの栽培と利用

藤 田 和 史

1. シュロおよび生育環境の特性

本節では、まず、松本(1952)を参考に、植物としてのシュロおよびその生育環境について概観する。

(1)シュロの樹木的特徴

シュロはヤシ科の樹木であり、大きく下記3種が知られる。日本国内で産する種は、ワジュロ(*Trachycarpus excelsa* Wendl, var, *typicus*)と呼ばれる。ユーラシア大陸で産する種は、トウジュロ(*Trachycarpus excelsa* Wendl, var, *Fortunei*)と呼ばれ、ワジュロとは区別される。また、ワジュロとトウジュロの混雑種であるアイジュロが存在する。このほかにも栽培者による区別としては、「雄木^{おんぎ}」と「雌木^{めんぎ}」の別があるという。雄木は鬼棕櫚とも呼ばれ、生育が旺盛で樹勢がよく、良質の樹皮が採取できるものを指す。雌木は姫棕櫚とも呼ばれ、樹勢・樹皮の質は雄木には及ばないものの、晒葉用の新葉が柔らかく良質であるとされた。

シュロの木は雌雄異株である。幹に枝はなく円筒状であり、葉は幹の上部に傘状に繁茂する。下に生じた葉は、幹が生長するに従って暫時枯死する。根は直根はなく、多数の短い鬚根が叢生する。葉は大きく扇形に広がり、深く裂けて線状に多数の列片を手のひら状に拵げている。葉の柄は長く、断面は丸みを帯びた三角形をしている。そのうち2稜には棘が生じている。柄の基部には繊維状の葉鞘があり、これがいわゆる樹皮となる。葉は年に12枚程度生じるといわれているが、新葉は扇子をたたんだ形状で発生し、成長するにつれて広がっていく。

花は、5月頃に幹の頭部に花穂を生じ、そこに多数の黄色い小花をつける。一つ一つの花は、花弁は6枚で、雄花には6つの雄蕊、雌花には1つの雌蕊がある。雄花と雌花は花穂の形態に相違があり、雄花の穂は黄色で垂下する傾向があるが、雌花の穂は緑黄色を呈して直立する。雌花は雄花よりもやや遅れて出穂するとされる。果実は10月から11月頃にかけて成熟し、1花房あたり400~500粒ほど実生する。1株に2~5房程度生じるが、花房数は隔年結実の傾向がある。

(2)シュロの生育環境の特性

シュロは熱帯地方原産のヤシ科の植物であるため、温暖な気候を好む。垂直分布については高野山付近を指標として考えると、日照・風向による地域差はみられるが、標高500m付近に高距限界がある。しかし、良好な生育を期待するには、年平均気温12℃、冬期の平均気温1.8℃程度が必要といわれ、それは標高350~500m程度に相当する。一方、シュロは耐寒性に優れるため、水平分布としては本州でも東北地方南部までは露地で植栽可能である。なお、シュロは湿

潤熱帯原産の植物であるが、極端に湿潤な気候を嫌う。成長期においては相当程度の降水が必要であるが、梅雨時の降雨のように連続する降水は病害を発生させる。

気候条件と同様に、シュロの栽培には地質および土壌が生育に大きな影響を及ぼす。松本(1952)に掲載される表を参考にすると、以下のような傾向がみられる(表1)。これによると、秩父層群および三波川層群などの古生層、そして和泉層群および有田川南岸の古生層に接する中生層が分布する地域で、シュロの栽培面積・栽培本数が多い。その反面、中生層や新生代第三紀の地層が分布する地域では、相対的に栽培面積・栽培本数は小さくなる。これらのことから、相対的には風化が進んだ地質を指向する様子がわかる。また、土壌については肥沃な腐食質を持つ黒みがかった水はけの良い砂質土壌のほうが、生育成績が良いとされる¹⁾。砂質土壌、粘土質土壌に偏っても生育成績は悪くなるという。そして、シュロは根が浅いものの、表土自体はある程度の厚みがある方が、生育には適している。なお、やや傾斜した斜面の方が生育に適しているが、斜度25度程度までが限度とされる。

2. シュロ栽培・利用の歴史とその地域的展開

本節では、海南産地の形成について海南特産家庭用品協同組合編(1989)『海南地方家庭用品産業史』(以下、組合編(1989)とする)等既存資料に依拠しながら、その歴史的過程を概観する。

(1)栽培の由来と近世までの歴史

和歌山県内でのシュロ栽培に関する歴史は古く、空海が唐から持ち帰った種子を寺に蒔いたとされる「弘法大師伝来説」が残されている。しかしながら、枕草子の記述等に見られるように往古からシュロを植栽する風習はあったようであり、中世後期には、有田郡阿氏河荘(現在の有田川町清水区)の住民が山中に自生していた棕櫚を観賞用に植栽したことが伝えられているという(組合編1989:3)。これらの状況から、シュロ自体は古くから日本に帰化・自生していたものと考えられる。

シュロを栽培目的で植栽するようになったのは、中世末期のことと伝えられている。組合編(1989)によれ

表1 シュロの生育成績と地質の関係(1952年)

地質	栽培地	栽培面積 (ha)	植栽本数 (千本)
和泉層群 (紀の川北岸)	伊都郡四郷村	198.4	1400
	那賀郡上名手村	14.88	113
三波川層群 (結晶片岩)	那賀郡奥安楽川村	39.68	690
	那賀郡瀬淵村	29.76	216
秩父層群 (野上谷)	那賀郡小川村	67.456	540
	那賀郡真国村	37.696	300
	那賀郡細野村	62.496	472
秩父層群・中生層 (有田川北岸・古生層) (有田川南岸・中生層)	那賀郡長谷毛原村	88.288	620
	有田郡城山村	34.72	240
	有田郡五村	79.36	600
	有田郡八幡村	277.76	1800
中生層	有田郡安諱村	128.96	828
	伊都郡花園村	92.256	651
新生代第三紀層	日高郡寒川村	4.96	36
	日高郡龍神村	1.488	20
	東牟婁郡宇久井村	1.488	19
	東牟婁郡色川村	0.992	11

資料：松本(1952)

注：1) 栽培地名は1952年当時のもの。

2) 栽培面積は原表の町からhaに変換した。

ば、明治26年の「和歌山県農事調査書」にシュロ栽培に関する伝記が記載されている。その記述によると、有田川町清水区楠本にある結城という小字に住む「結城式部」なる篤農家がシュロの有用性に気づき、村人たちにその栽培を勧めたとある。現在でもその子孫に当たる前島家が同地に居住しているが、記録等が残されておらず、詳細についてはわかっていない。

シュロの栽培に関する記録のうち、確認できるもっとも古いものは江戸時代である。江戸時代後期に出版された『紀伊國名所図會』には山保田荘(現在の有田川町清水区に相当)の特産物として、シュロ樹皮の記載がある(高市ほか 1811)。その記載によれば、毎年春と秋に樹皮を剥いで出荷し、当該地域の物産として有名であった肉桂と並ぶと紹介されている²⁾。また、名所図會とほぼ同時期に出版された『紀伊続風土記』でも、卷之九十五、産物第三、木部に那賀郡野上荘から在田郡山保田荘一帯の特産物として棕櫚が挙げられている(和歌山県神職取締所編 1910)。続風土記の記載では、樹皮もしくは樹皮を縄に加工して出荷し、多くの利益を得ていたようである³⁾。同様の書籍として、『十寸穂の薄(ますほのすすき)』が1815年(文政8)に著されており、名草郡と那賀郡の項に物産としてシュロ樹皮が記載されている(国岡 1929)。これでは、より具体的にシュロ樹皮がどの地域で産出されたが記載されており、名草では山東方面、那賀では野上谷で栽培・採取が盛んだったようである。

このほか、和歌山県農事調査書には、江戸時代に樹皮とともに新葉の晒葉が、細工用の竹皮の代用品として天保年間から弘化年間(1830~40年代)に広く利用されたとの記録がある。これは、江戸時代後期に全国で竹の病気が発生し、竹皮が供給できなくなったことによっている。竹は1850年代くらいになると復活してくるが、それまでは全国的に竹皮が不足しており、シュロの晒葉がその代用品として広く利用された。それをきっかけとして、晒葉を生産し、商う専門業者が産地の山保田荘、那賀郡遠方村(現在の紀の川市遠方)、名草郡の大野村や日方村(いずれも、現在の海南市)に出現したという⁴⁾。このような業者の存在が、近代以降に発展したシュロ産業の基礎となったことは想像に難くない。

さて、シュロは春と秋の2期が樹皮の採取時期であり、両方で採取することもあったが、春のみの採取、秋のみの採取のどちらかが多かったという。これは第二次世界大戦後になっても変わらなかった。樹皮については、春に採取したものは厚みがあり、幅が広い良質のものが多くとされていた。ただ、シュロの樹皮を採取する作業は、農閑期の副業的要素が強いとの指摘もあり、秋に採取されることも多かったようである(組合編 1989)。シュロ樹皮の発生は、年10~12枚程度といわれ、そのうち6~8枚を採取するのが標準とされた。剥離する量としては、立ったまま作業する場合と、高所で作業する場合とは異なるが、男性なら1日で平均1000枚程度の樹皮を採取したという。ただ、過剰に採取すると、木の本体を弱める恐れがあった。採取の方法としては、鎌と紙裁包丁を利用して樹木本体から切り離す(写真1)。幹を傷つけると、シュロの木が弱るために注意が必要であったという(松本 1952)。山保田等山間部の各地で産出されたシュロ樹皮は、集荷に訪れる仲買を経て谷口の美里町神野市場へ、そして神野市場から日方街道を下って日方・名高へと出荷された。輸送は駄送が中心であったといわれるが、人送も多かったという。1916年に野上軽便鉄道(後の野上電鉄)が開業すると、鉄道輸送へと切り替えられた(組合編 1989)。

写真1 樹皮を剥いだ状態のシュロと道具（2012年10月）



シュロの樹皮は環状に剥がれるが、剥いだ箇所は徐々に乾燥していき、その後樹皮は発生しない。（有田川町清水区にて著者撮影）

(2)近代以降のシュロ栽培と利用の歴史

近世期には、主として自家用に縄・綱・下駄緒等に加工して利用されていたシュロであるが、近代に入っても漁網など縄・綱、箒、外套などの材料とされた以外、利用の幅は大きくは変化しなかった。このような中で、本格的なシュロ縄生産が開始されたのは1870年代の終わり頃といわれる。当初は生産量も大きくはなかったようであるが、シュロが持つ耐水性・耐久性が注目され、漁網・漁具・農業用・建築用資材、そして縄を繊維状に編んだマットや袋として需要が拡大するようになった。とくに、鮮魚用のトロ箱のヒモとして需要があったようである。

この縄・綱も当初は手織いのもが多かったが、1910年頃になると足踏みの製縄機を使用した機械織いのもが増加した。縄の生産は、当初農家の副業として行われたが、機械化が進むにつれ生産量も増加した。生産量の増加と時期を同じくして、産地内の問屋の数も増加した。1920年代にはシュロ・シュロ製品の出荷は全国各地へと拡大し、農家の副業的な側面が強かったシュロ産業も農村工業へと規模を拡大した。ことに、縄・綱の生産量増加や製縄技術の向上に貢献したのが、山本勝之助(1862～1939年)である。山本家は肉桂・山椒・蜜蝋など山産物の集出荷を業としていた。1880年、家督を継いだ勝之助は樹皮のまま出荷されていたシュロについて、出荷先での加工の様子を観察した中から、加工後の出荷を考えたのだという。勝之助は、まず農家の内職として製縄を薦め、生産された縄を出荷するようにした。また、勝之助は増えた同業者らと出荷組合を結成するなど産地全体の振興にも尽力した。さらに、勝之助は増加する需要に応じて、1910年に原料としてパーム繊維に輸入を始めたほか、1920年ころには足踏み式の藁縄用製縄機を改良したシュロ縄用製縄機を開発し、産地の規模拡大に貢献したのである。

さて、縄・綱・マットなど、シュロを原料とする製品が多様化するにつれて、生産額も増加するようになった。シュロ樹皮を扱う山産物問屋、シュロ製品を扱う産地問屋やシュロ製品生

産を行う生産業者は谷口の神野市場より下手の阪井・沖野々・中野上など、いわゆる野上谷の谷口付近の集落で増加しつつあった。

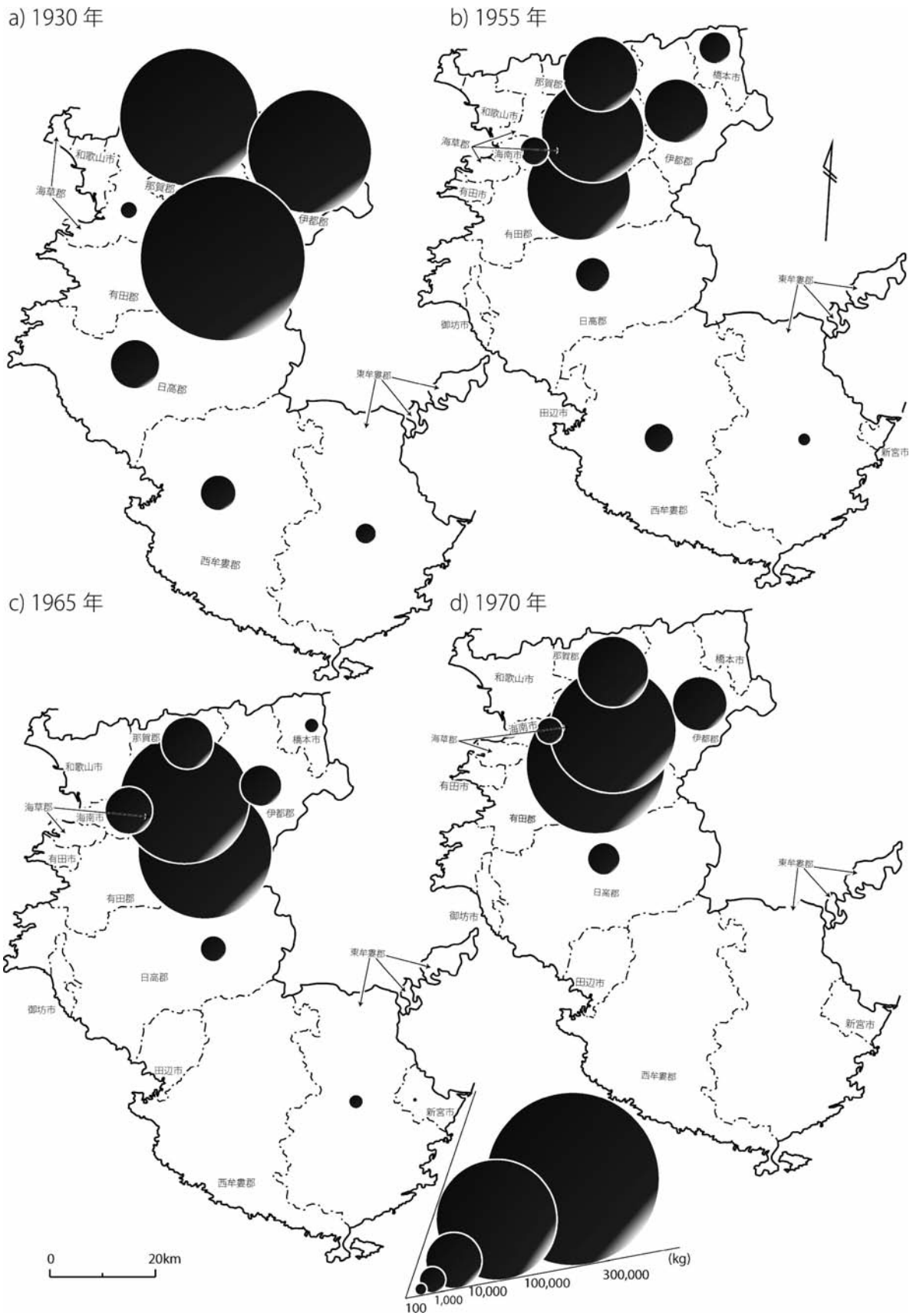
シュロ産業の成長が著しい反面、明治末期頃になると原料であるシュロが不足するようになった。シュロは、植栽から樹皮や葉の採取に適するものに成長するまで10年程度が必要である。不足するシュロを補うために、先述のようなパームの輸入が開始された一方で、1910年頃から他府県産の移入シュロや中国華南地方産の輸入シュロも流通するようになった。産地内では、大正期に野上谷奥の山間部にある長谷毛原、真国、小川、上河野の各村(いずれも、現在の紀美野町)で、植林と増産が行われた。これらの成果を示すように、1927年にはシュロの栽培面積は1500町歩(約1488ha)に達し、生産された縄・綱・マット・箒などは海外に輸出されるまでになった(組合編 1989)。

この当時のシュロ樹皮生産量を市郡別に示したのが、図1のa)である。これによれば、那賀・伊都・有田の3郡で生産量が突出する一方で、南部の日高・西牟婁・東牟婁の3郡では少ないことがわかる。これは、前章でみたように土壌・気候などがシュロの生育に不向きであったためと考えられる。紀北3郡のシュロ樹皮の生産は増加したが、安価な代用品としてのパーム繊維の輸入も増加し続けた。その結果、シュロ樹皮生産を圧迫するようになり、栽培も一時的に減少したといわれる。しかし、1920年代初頭にシュロの晒葉の加工法が革新し、それともなって再びシュロの栽培は増加に転じた。しかしながら、1930年代以降になると、シュロ樹皮の生産は徐々に縮小し、代わって晒葉の需要が増加するようになった。昭和戦前期を通じて、晒葉の生産は拡大を続け、1912年から1936年のおよそ15年間に生産量は3倍、生産額では11.5倍に増加している⁵⁾(組合編 1989)。

(3)昭和以降の海南産地

1931年の満州事変、1937年の日中戦争開戦以来、縄・綱の需要が軍需を中心に高まり、1938年8月には軍需品として大量に買い上げられるようになった。これによって、シュロ産業は活況を呈することとなったが、1942年11月にシュロ樹皮・晒葉が戦時統制品の指定を受けたことで、産地は急速に縮小することになった。また、1944年1月には、「棕櫚皮および棕櫚製品集荷統制要綱」が定められ、シュロ製品・生産業者も原料調達から出荷まで管理下に置かれることになった。パーム繊維についても国家総動員法(1938年)制定にともなって、政府及び統制組織の管理下に置かれることとなり、英領インドからの輸入に依存していた海南産地では打撃を受けることになった。僅かに供給される代用品や、産地内で産出されるシュロ樹皮は、軍需品である縄・綱・ロープの生産に優先的に回され、箒などの雑貨類の生産はほぼ不可能となった。これは、都市部にあった日用消費財生産者にとっても同様であった。そのうち、「亀の子だわし」の生産で知られる西尾商店も、パーム繊維の供給が途絶えたことで、タワシの生産ができなくなった。西尾商店では代替素材の探索を行い、和歌山県内で産出するシュロに着目し、シュロ樹皮を利用したタワシの生産を行うようになったといわれている。海南産地では箒の生産が以前から行われており、そこから派生したタワシの生産も行われていた。西尾商店はそれに着目

図1 市郡別にみた和歌山県内におけるシュロ樹皮生産量の推移（1930・1955・1965・1970年）



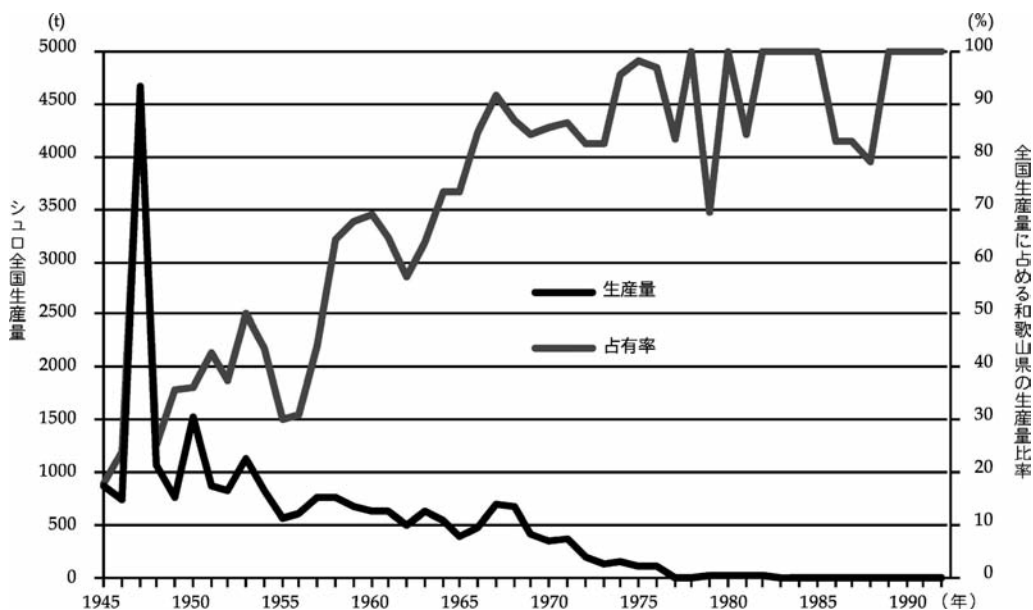
和歌山県統計書各年版より作成

したと考えられる。

第二次世界大戦終結後、軍需産業の民需転換によって、戦時統制品とされたシュロ製品の生産も和雑貨を含めて再開されることになった。しかし、シュロ・パーム等の繊維供給は統制下に置かれたままであり、原料の調達も満足には行えない状態であった。その一方で、戦後の食糧不足に悩まされていた政府は、食糧増産の目標達成のために、統制資材を優先配給していた。それに着目した産地内の生産者らは、漁網、ノリ養殖、田縄等農林水産業業用ロープを生産する名目でシュロ樹皮を手に入れて、縄・ロープを生産し始めた。縄やロープの生産を行う傍らで、かつて箒等の雑貨類を生産していた生産者や新規参入業者が雑貨生産を再開するようになった⁶⁾。生産される雑貨類の中で急速に増加したものが、西尾商店の例に着想を得たタワシであり、新規参入業者によるタワシの生産が顕著であった。

旺盛な需要に支えられ、農林水産業用ロープ類、和雑貨類の生産は復活の緒に就いた。とりわけ、和雑貨類ではタワシの生産が1947年頃から拡大した。ところが、必要とされる原料であるシュロ樹皮の生産が不足するようになり、同年にはシュロ樹皮の価格が急騰した。生産者らは政府に陳情した結果、占領軍の援助を得てパーム繊維の輸入が再開された。このほか、紀北の山間部ではシュロの生産量が急速に増加している。図2は第二次世界大戦後の国内におけるシュロ樹皮生産量と和歌山県の生産量の対全国比の推移を示している。戦争中の統計が欠損しているために正確な状況は判断できないが、原料不足を補うために樹皮の増産運動が展開されたようである⁷⁾(和歌山における地場産業の実態と将来動向に関する研究会 2006)。図2から戦後の様子を見ると、1947年に生産量が急増しているが、それ以降は多少の上下をしながら急速に減少の一途をたどる。1947年の急増は、シュロ樹皮価格高騰によって、需要が急増したことによる増産と、農家の現金収入の手段として樹皮が盛んに採取されたためであると考えられる。翌年以降の急減と以降の減少は、戦争中とこの乱採が契機となってシュロが弱り、樹皮・新葉

図2 全国におけるシュロ樹皮生産量と全国生産量に占める和歌山県の生産量の推移 (1945~1992年)



資料：農林水産統計各年版

ともに質が悪化したためといわれている(松本 1952)。ただ、1948年以降の減少に関しては事情が異なり、とくに1950年以降についてはパーム繊維やその他の競合する繊維類の統制解除による影響が大きいと考えられる。

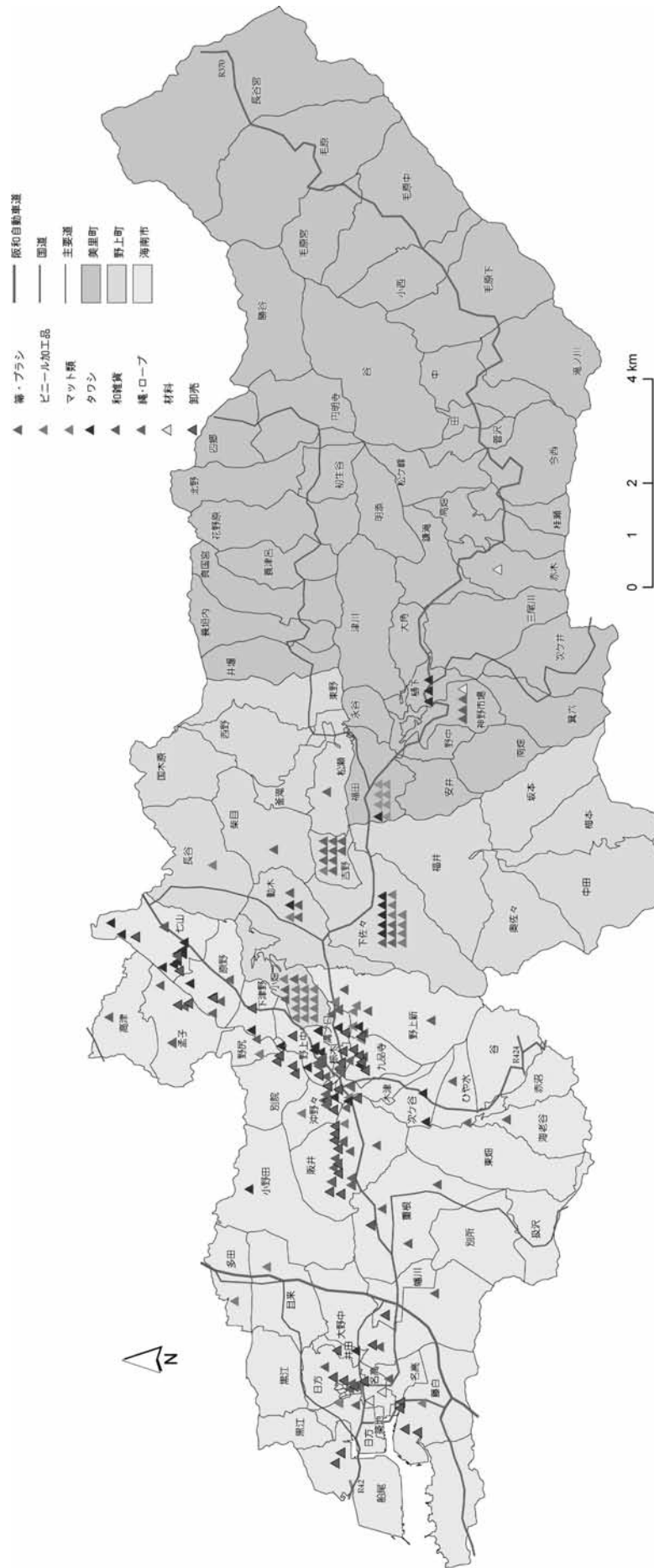
一方で、この時期は化繊・化成品の普及が進んだ時期でもあった。産地内で早い時期に化繊タワシを生産したのは、アイセンやキクロンであった。アイセンは、1950年代半ばに旭化成のサラン樹脂を使用したたわしの開発・生産を実施し、産地内における雑貨素材変革の嚆矢となった。その後、ナイロン素材を使用したロープの生産(1960年前後から)や、ウレタンフォームを使用した化繊タワシの生産(1958年頃から)など、化成品による製品が徐々に増加していった。折しも、日本の住環境の洋風化という変革期に当たり、家庭用洗剤の登場と相まって、1960年代にはナイロン素材・ウレタン素材のタワシ類の需要が増加していった。また、住環境の洋風化は、箒等の伝統的な清掃用具の需要を減らし、代わってモップの需要をもたらした。

戦争中・戦後の乱採による樹質の悪化により、急速に減少したシュロ樹皮の供給であるが、上記のような化学繊維の登場と住環境の変化でさらなる打撃を受けた。この時期のシュロ樹皮の供給の様子をみると、依然として産地の周辺3郡の町村が中心であることがわかる(図1 b)~d))。また、図2からもわかるように、第二次世界大戦後は全国のシュロ樹皮生産の大部分を和歌山県、とりわけこれらの地域が担っていた。しかし、需要の低下により樹皮・晒葉の取引価格が低下した反面、シュロ栽培の労賃は成長による高所作業や樹木の弱体化による作業困難ゆえ上昇した。これによって、廃木が増えたシュロ畑が放棄される一方で、積極的に植林する生産者が減少した。

他方、それらのシュロを利用する主体であった家庭用品・和雑貨生産企業についてみると、1975年に県が実施した『産地診断報告書』によると、海南市の和雑貨協同組合加入者が280、野上町商工会議所の和雑貨組合加入者が64、美里町商工会議所の和雑貨組合加入者が45、合計389社が産地内に立地している。このうち、原料供給を担う原料卸が15、卸が70(うち製造卸23)、製造業者(メーカー)が304という構成になっている。この構成は1990年頃までは維持されたようである。高度経済成長の終焉である1970年代半ばまで、事業所数ベースでは増加の一途をたどったが、それ以降は事業所の再編が進み減少傾向に入った。1980年代に入ると、再び従業者数は増加し、出荷額も拡大を続けた。この当時の関連企業の分布について組合名簿等を参考に作成したものが図3である。これをみると、卸が海南市街の日方・名高と、阪井・沖野々・野上中・九品寺・棕木等野上谷の谷口集落に集積している様子がわかる。これら卸の周辺に、製造機能を担うメーカーが多数立地している。また、卸は個人名を冠した小規模のものが多く、製造機能を持たない個人商店的な卸売業者が多数を占めていた。このほかにも多数の内職が周辺の農家等に出されており、問屋を頂点として内職に至るまでの生産体系が構築されていたことが判明している。これは、卸がメーカーを組織化して生産を行う産地形集積の典型である。さらには、谷を進んだ旧美里町の神野市場・赤木には材料卸の立地がみられる。ここからも、原料を集荷し、それらを谷口で加工して出荷し、それらの拠点を鉄道が結ぶという構造が理解できる。

しかし、家庭用品の化成品への素材転換、都市化・工業化の進展による多就業化や、一部の地域では果樹やその他の林産物への転換が進み、需要が低下したシュロ栽培は必ずしも農家の

図3 1982年当時の家庭用品関係業者の分布

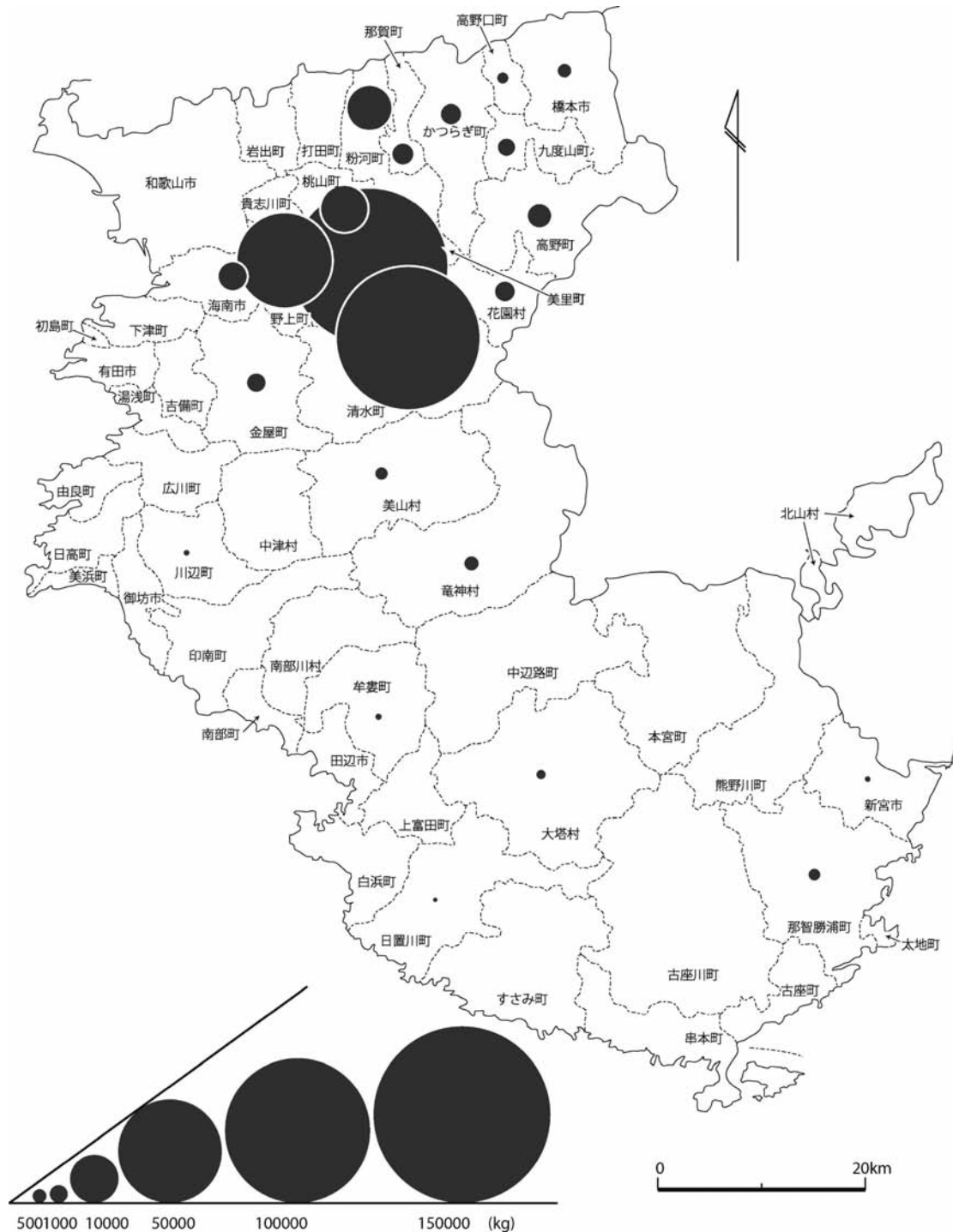


資料：「わかやまの地場産業(企業名一覧)」

注：野上町・美里町の業者については、資料の所在地に大字のみの記載であるため、企業の所在は代表点に示してある。

現金収入の手段となくなっていく。とくに、紀北の沿岸部が鋳工業整備地域に指定された1958年以降、住友金属などの重化学工業の工場が進出したことで、若年層の就業構造は大きく変化していったと考えられる。最後期のシュロ樹皮生産の様子を市町村別に示す図4を検討すると、野上町・美里町・清水町の3町、とりわけ美里・清水の2町で生産量が大きくなっている。これら2町は、大正後期から昭和初期にかけて、シュロ増産に対応した旧村を含む地域である。しかも、これらの町は山間部に位置し、交通条件が近年に至るまで劣悪であった。ゆ

図4 市町村別にみたシュロ樹皮の生産量（1962年）



資料：和歌山県統計書昭和39年版

えに、就業機会に乏しく、現金収入の手段としてシュロ栽培が維持された側面があると考えられる。この地域では、シュロは丈夫で手間がかからないと考えられており、比較的粗放的に栽培することができたことから、他の農産物や林産物生産の傍ら収穫することが可能であったという。そのようなシュロの特性が、栽培を維持させる方向で作用していたのであろう。残ったシュロ畑は、より付加価値性が高いサンショウ、コウヤマキやキノコ類などへの転作が進められた。また、標高が低い地域ではミカンへの転換が進んでいった。

現在でもシュロの栽培、樹皮・葉の採取・利用は、わずかながら続けられている。シュロ、とりわけ紀州産シュロを使用したタワシや箒は、高価格であっても品質を理解する高級料亭や根強いファンなどの需要によって支えられている。しかしながら、現在樹皮や葉が採取されているシュロは、戦後に細々と植林・更新された樹木であり、高齢化が進んでいる。樹木と同様に、栽培そして採種に携わる生産者も少数となり、高齢化が進んでいる。利用者側である家庭用品生産者の一部がシュロの保護・育成に関わるようになってきているが、かつてほどの規模へは到底追いついていない⁸⁾。林産資源として利用し続けるためにはシュロの植林・更新が必要となるが、生産者が感じるインセンティブは大きくない。取引価格や労賃など、いかなるインセンティブを提供しうるかが、今後のシュロ栽培持続の可否を握っているといえよう。

【付記】

本稿は、藤田(2013)として発表した著作の一部を加筆し、再構成したものである。

注

- 1) 松本(1952)によれば、シュロの生育に適するのは、砂岩層、古生層ないしは結晶片岩などの変成岩質土壌であることを指摘している。いわば、風化が進んだ土壌を好むことを示している。日高以南の3郡は中生代から新生代の新しい土壌が卓越し、かつ降水量も多いことがシュロの生育には相対的に不利であったと考えられる。
- 2) 紀伊國名所図は、1811年(文化8)～1851年(嘉永4)にかけて出版された、紀伊国内各地の名所を挿絵入りで紹介した書物である。紀伊國名所図會によれば、以下のように記載されている。「山保田荘中、諸村多く棕櫚を植えて、春秋その皮を剥きて諸国にひさく。年々この益少なからず、肉桂に次いで産物なり。」
- 3) 紀伊続風土記は、1806年(文化3)～1839年(天保10)にかけて編纂された地誌書である。編纂を命じたのは紀州和歌山藩第10代藩主徳川治富で、藩の儒学者仁井田好古を中心に本居大平・加納諸平ら当時の著名な学者が、多数編纂に動員された。その記載内容は下記の通りである。「棕櫚 各郡皆あり。中にも那賀郡野上荘山奥より在田郡山保田荘辺に多くうゑて、其皮のまま又繩となしたるを諸国へ多く出す。其利甚大なり。」
- 4) 詳細については、組合編(1989)を参照のこと。
- 5) 組合編(1989)によれば、同時期の樹皮生産は、生産量で1.8倍、生産額では1.5倍の成長にとどまるという。原料の不足を補うために、代用品である苧麻(ラミー)の栽培研究が県の推奨で1934年頃から那賀・伊都両郡において進められている。しかし、成績は芳しくなく、研究は続かなかったようである。
- 6) これは、用途の監督が厳しくなかったために可能な方法であったという。
- 7) 清水町誌にはシュロの増産を呼びかけるポスターが掲載されている。
- 8) 高田耕造商店の高田大輔氏が、有田川町や紀美野町内でシュロの保護・育成の取り組みを進めている。「和歌山・有田川町でシュロ皮の収穫初め 身体洗い用タワシに加工も」和歌山経済新聞webサイト <https://wakayama.keizai.biz/headline/1267/> (2020年1月30日最終確認)

参考文献

- 海南特産家庭用品協同組合編 1989. 『海南地方家庭用品産業史』海南特産家庭用品協同組合。
国岡傳次郎 1929. 「十寸穂の薄」紀伊郷土資料頒布会。
高市志友ほか 1811. 『紀伊國名所図會 後篇 三之巻 在田郡』国立国会図書館蔵

- 藤田和史 2013. 『海南市の家庭用品産業集積における開発・販路拡大活動の企業空間とネットワーク』地域研究シリーズ42(和歌山大学).
- 松本由友 1952. 『林業普及シリーズ第33集 しゅろ』林野庁指導部研究普及課.
- 和歌山県神職取締所編 1910. 『紀伊続風土記 第三輯』帝国地方行政学会出版部.
- 和歌山市における地場産業の実態と将来動向に関する研究会 2006. 『和歌山における地場産業の実態と将来動向に関する研究会報告書』和歌山地域経済研究機構